

Title	<書評> I. de Rachewiltz, The Secret History of the Mongols : A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century. Translated with a historical and philological commentary. 2 vols, Leiden/Boston, 2004
Author(s)	山本, 明志
Citation	内陸アジア言語の研究. 2005, 20, p. 123-135
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/17150
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

＝ 書評 ＝

Igor de Rachewiltz, *The Secret History of the Mongols: A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century. Translated with a historical and philological commentary.* 2 vols. (Brill's Inner Asian Library, Vol. 7), Brill, Leiden / Boston, 2004.

山本明志

本書は Igor de Rachewiltz 氏による『モンゴル秘史』（以下『秘史』と略称する）の英語での完訳・訳注である。著者は世界的に有名なモンゴル歴史学・言語学研究者であり、現在オーストラリア国立大学（Australian National University）で研究活動を行っている。これまでも数多くの論著を発表しており、特に評者を含めたモンゴル時代史研究者に多大な影響を与え続けている。

前近代のユーラシア史において、遊牧騎馬民族の果たした役割は極めて大きなものであるにもかかわらず、その活動は主として定住農耕民の視点から記述されてきた。例えばユーラシア東部の漢地世界では膨大な漢籍史料が編まれ、その中には遊牧民や遊牧政権に関わる記述も見いだされるものの、それらは決して遊牧民自らが語るものではない。当然のことながら、そこには定住民側の誤解や偏見が介在することになる。一方で、遊牧民自身が自らの言葉で残した史料としては、モンゴリアなどに残る突厥・ウイグル時代のルーン文字碑文、トルファン・敦煌などから発見されたウイグル文字文書などが挙げられる。それらが持つ価値は非常に高く、決して忽せにできないものではあるが、その総体は大きいものとは言い難い。しかし、遊牧民が定住農耕民世界に侵攻し、それらを支配するノウハウを匈奴・鮮卑・柔然・突厥・ウイグル・契丹と受け継いできたモンゴルが、13世紀にその集大成ともいうべきモンゴル帝国をうち立てると、彼ら自身の言葉で長大な文献を書き記すことになる。それが『秘史』である。もちろん、定住農耕民による遊牧騎馬民族に対する無知・偏見はどこにもない。非常に生々しい遊牧民の生活・戦争・習俗の記載がそこにはある。

ユーラシア前近代史を研究する者にとって、これが第一級の重要文献であることは言うまでもない。

『秘史』から得られる情報は非常に豊富である一方、現在われわれが目にすることができる本は、明代に編集されたものであり、書かれた当時の姿をとどめてはいない。それは中世モンゴル語で記された原テキストの漢字音写、単語ごとに付された傍訳、節ごとに漢語で記された総訳からなり、漢文の素養、現代モンゴル語の知識があったとしても、読み解くことは容易ではないのである。その内容理解、言語の分析などについて、これまでに長い研究史がある。⁽¹⁾中でも、世界で初めて非常に高いレベルにある全訳を示した那珂通世、詳細な歴史学的注釈を行った村上正二、現在でも世界最高水準にある言語学的注釈を付した小澤重男の研究などは、我が国が世界に誇る一大成果である。

De Rachewiltz 氏は、本書以前に『秘史』の訳注を 1971 年から 1985 年に渡り *Papers on Far Eastern History* (PFEH) 誌上に英語で発表してきた。⁽²⁾つまり本書は著者による二回目の全訳・訳注なのである。PFEH 誌は日本の大学・研究機関ならばどこでも完全に揃えられているというものではなかったため、著者の以前の訳注は簡便に参照し得るものとは言い難かった。それが今回、増補・改訂された上、二冊本にまとまって刊行されたことは、参照の便宜という観点からも、非常に喜ばしい。

また、著者はこれまでに多くの論文で、『秘史』に関わるさまざまな見解を提示してきた。これらが看過できない重要なものであり、現在の研究の進展に大

(1) 『秘史』の転写・訳注の研究史については後でも述べるように、本書 Introduction 7 に簡潔にまとめられている。

(2) I. de Rachewiltz, tr., "The Secret History of the Mongols, Chs. I and II", PFEH (Canberra), 4, 1971, pp. 115-163 (12 巻本の第 1 巻・第 2 巻の訳注)。以下、第 3 巻：PFEH, 5, 1972, pp. 149-175。第 4 巻：PFEH, 10, 1974, pp. 55-82。第 5 巻：PFEH, 13, 1976, pp. 41-75。第 6 巻：PFEH, 16, 1977, pp. 27-65。第 7 巻：PFEH, 18, 1978, pp. 43-80。第 8 巻：PFEH, 21, 1980, pp. 17-57。第 9 巻：PFEH, 23, 1981, pp. 111-146。第 10 巻：PFEH, 26, 1982, pp. 39-84。第 11 巻：PFEH, 30, 1984, pp. 81-160。第 12 巻：PFEH, 31, 1985, pp. 21-93。補遺と訂正 (Additions and Corrections)：PFEH, 33, 1986, pp. 129-137。

きな影響を与えてきたことは言うまでもないだろう。本書の Introduction においては、そのエッセンスがまとめられており、『秘史』の文献としての性格や、『秘史』の研究史の理解を深める上で、大きな助けとなる。本評では特にこの Introduction を中心に取り上げることとし、訳文・注釈に対する評価・批判は諸専論にゆだねたいと思う。

まず以下に本書の構成を示す。

< Vol. 1 >

序文

地図 (map 1 : 1200 年頃のモンゴリア / map 2 : 1210 年頃のユーラシア)

略号表

Introduction

- 1) 『秘史』の内容・主題 (pp. xxvii-xviii)
 - 2) 『秘史』の編纂地・成立年代 (pp. xxix-xxxiv)
 - 3) 『秘史』の作者像 (pp. xxxiv-xl)
 - 4) テキストの来歴 (pp. xl-liii)
 - 5) 『アルタン=トブチ』にみえる『秘史』のテキスト (pp. liv-lix)
 - 6) 歴史・文学としての『秘史』 (pp. lix-lxx)
 - 7) 『秘史』の転写・翻訳・版本 (pp. lxx-lxxvi)
 - 8) 今日の『秘史』研究 (pp. lxxvii-lxxix)
 - 9) 本書について (pp. lxxix-lxxxii)
- 注) (pp. lxxxiii-cxiii)

各巻の要約 (pp. cxv-cxxvi)

12 巻本と 15 巻本の節構成対照表 (p. cxxvii)

『秘史』訳文 (pp. 1-218)

注釈 [§ 1- § 177] (pp. 221-642)

< Vol. 2 >

注釈 [§ 178- § 282] (pp. 643-1044)

Appendix

- 1) 1204 ~ 1219年チンギス=カンの征服戦争年表 (pp. 1045-1050)
- 2) 『秘史』・『アルタン=トプチ』対照表 (pp. 1051-1054)
- 3) Damdinsüren 著作中の『秘史』対応表 (p. 1055)
- 4) A. Mostaert 『秘史』研究 (1953年) で言及される
『秘史』の節一覧 (pp. 1056-1059)
- 5) F. W. Cleaves 『秘史』訳註 (1982年) 補訂一覧 (pp. 1060-1063)
- 6) I. de Rachewiltz 『秘史』索引 (1972年) 補訂一覧 (pp. 1064-1076)
- 7) Wade - Giles 方式 / 拼音方式 表記対照表 (pp. 1077-1080)

文献目録 (pp. 1081-1194)

索引

- 1) 固有名詞・地名索引 (pp. 1195-1245)
- 2) その他語句索引 (pp. 1246-1314)
- 3) モンゴル語彙索引 (pp. 1315-1342)

補足・訂正 (pp. 1343-1347)

チンギス家系図

本書のIntroductionでは、『秘史』の内容、編纂の場所と時期、作者像、テキストの歴史(『アルタン=トプチ』に含まれる『秘史』のテキストにも言及)、『秘史』の転写と翻訳の歴史などのトピックについて、非常に的確に検討がなされている。一方で、これらのトピックの多くは、小澤重男『元朝秘史』(岩波新書、1994)においても取り上げられていることに注意したい。こちらは一般向けに書かれていたとはいうものの、小澤氏のオリジナルのアイデアが数多く根拠とともに示されており、あわせて参照すべきものである。本書を通じて著者は日本語文献も多く利用しており、我が国における『秘史』の研究史も正確に理解されているの

だが、この小澤氏の著作が言及されていないのは惜まれる。とはいうものの、本書の Introduction は、特に海外でいかに研究がなされてきたかが簡潔にまとめられており、膨大な研究蓄積を持つ『秘史』の研究の現状を知る上で、非常に有用であることは間違いない。

Introduction 1 では、まず『秘史』の構成について検討がなされている。著者は、§1～§268 におけるチンギスの祖先の描写・チンギス自身の事跡の記述が非常に詳細であり、視覚的に描かれているととらえる。一方、§269～§281 のオゴデイ時代の記述は、税制・駅伝制度などの重要な記述があるものの、断片的であると評価する。

Introduction 2 では、日本でも多くの議論がある『秘史』の編纂地と成立年代について論じられる。まず、その編纂地は§282 の奥書の記述から、北と西にバヤン山脈が走り、ケルレン河とツェンケル河にはさまれた広大な草原である「シルギンチュクと[]⁽³⁾の間にある、ケルレン河のコデエ=アラル(不毛の島)のドロアン=ボルタク(七つの弧峯)」であるとする。ここは、チンギスが主に屯営していたオルドがある場所であり、1229年にオゴデイをカアンに選出したクリルタイが開催された場所であると著者は述べる。

著者はふれていないが、近年の現地調査から得られた考古学的成果に基づく研究を陸続と発表している白石典之氏は、『秘史』のこの箇所を「ヘルレン河の川中島にある七つの丘の麓の、シルグ合流点という(ヘルレンとハルオスの)二つの河にはさまれた場所」と解釈する新案を提示している⁽⁴⁾。最新の見解として、あわせて参照すべきであろう。

『秘史』の成立年代については、まず§282 の奥書に見える「ネズミの年」を手がかりに、先行研究で示された1228年・1240年・1252年・1264年・1324年の諸説を丁寧に紹介している。その上で著者自身は、最初に1228年にチンギスの事跡に関わる§268(12巻本の巻12の途中)までの版が編まれたのであり、

(3) 著者は[]の部分をもとを原文の脱落と考えている。

(4) 白石典之『世界の考古学 ⑨ チンギス=カンの考古学』同成社、2001、pp. 127-133。

奥書に見える「ネズミの年」は1228年であると考え、そして、オゴデイの事跡が記される§269～§281は、グユクの即位年である1246年、もしくは遅くともモンケの即位年である1251年以前に書かれ、本来は§268の後にあった奥書だけが§282の箇所に移されたのだとする。

この問題については、前掲の小澤氏の著作で新しい見解が示されていることにも注意したい。小澤氏は、従来から著者によって提示されているこのアイデアが魅力的であるとしつつも、§268はチンギスの死亡記事である「ブタの年(1227年)、チンギス=カアンは天に昇った」という文章の直後に「(チンギスが)天に昇った後、イエスイ妃にタングート人聚から非常に多くを与えた」という一文を続けて記していることに違和感を覚え、次のように考える。

『秘史』は本来、分巻されていたはずはなく、分巻は後代に行われたはずである。しかし分巻されていたことには、おそらく意味がある。12巻本の巻10(15巻本の巻12)にあたる§246まではモンゴル国内史、12巻本の巻11・12(15巻本の巻13～15)は外征史ととらえることができ、内容からこの二者は区別される。そして、12巻本の巻10までは1228年(戊子)に書かれ、巻11以降の§247～§273は1252年(壬子)に書かれた。§274～§281はもしかすると1264年(甲子)に書かれたのかもしれない。この解釈に従うと、1228年・1252年・1264年はいずれも「ネズミの年」にあたり、巻11・12にあたる部分が増補されたとしても奥書が示す「ネズミの年」は、なお有効であったのだ、と考えるのである。⁽⁵⁾

このアイデアも非常に興味深く思われ、注目すべきである。ただし、『秘史』の成立年代についての議論は、現在の史料状況からはいずれとも決定しがたいのも事実である。今後もこの問題については、さらに議論を深める必要がある。

Introduction 3では、『秘史』の作者像について検討がなされる。まず、これまでに出されてきたタタトンガ説、チンカイ説、シギクトク説などを紹介し、最終的に著者自身はシギクトク説を採用。しかしながら、シギクトクはチンギス

(5) 小澤重男『元朝秘史』(岩波新書346)岩波書店、1994、pp.124-144.

の西方遠征に参加しているにもかかわらず、『秘史』における西方遠征の記事が簡略すぎることから、否定的な意見もこれまでに与えられている。著者はこれに対し、シギクトクがパルワーンの戦いで敗戦したことから、西方遠征が彼にとって忘れてしまいたいエピソードであり、それゆえに記事が簡略なのだと反論している。また著者は、『秘史』の作者の主たる興味は国内問題にこそあり、想定できる作者像は古参の保守的な人物であろうとする。またその場合、シギクトクが作者ならば、彼と対抗していた耶律楚材や粘合重山が『秘史』に登場しないのも説明がつくとしている。

Introduction 4 では『秘史』のテキストそのものについて述べられている。まず『秘史』がウイグル文字モンゴル語の状態から、いかにして漢字音写され、傍訳と総訳ができあがったかを先行研究に依りつつ検討し、現在残されている諸写本の書誌学的情報をまとめている。その上で、本書においては、1908年に葉德輝が出版したY¹、『四部叢刊』三編本Y²、Palladiiが入手し1962年にモスクワで写真複写版が公刊された15巻本Y³と『アルタン=トブチ』をモンゴル語転写・翻訳に利用し、漢語総訳については15巻本の連筠蓀叢書本Y⁵を利用することが述べられる。⁽⁶⁾

Introduction 5 では、『アルタン=トブチ』と『秘史』の関係について論じられる。1926年に発見された『アルタン=トブチ』写本に、『秘史』のテキストの大部分が含まれていることは、周知の事実だろう。著者はまず、現在ウランバートルにある『アルタン=トブチ』写本の公刊の歴史をまとめ、その上で、Ligeti氏によって示された、『秘史』と『アルタン=トブチ』との関係を十項目にわけて簡潔に説明する。そして、我々が目にする明代に編纂された『元朝秘史』よりも、よりオリジナルに近いかたちのものとして、『アルタン=トブチ』中に残された『秘史』のテキストを評価する。なお本書の注釈においては『アルタン=トブチ』中の『秘

(6) Y⁴は Pelliot 氏が所蔵していたテキストで、現在 Bibliothèque Nationale de France にある。所蔵番号は Ms. Chinois 11003 である (本書, p. xcii, n. 142)。

史』のテキストが十二分に利用されており、また本書の Appendix 2 では現行の『秘史』と『アルタン=トプチ』との対応関係が示されるリストが収録されている。

Introduction 6 では、『秘史』の文献としての性格について検討されている。『秘史』を史料として無批判に利用できないことは、あらゆる編纂史料と同様のことである。一方で、『秘史』には歴史記録としてはほとんど価値がないとする見解までも、これまでに出版されているのである。こうした中で著者は『秘史』を「事実と虚構が入り交じったチンギス=カンの叙事詩的物語」「英雄叙事詩というよりも叙事詩的年代記」と評価するのが適当であるとし、歴史事実だけを抽出するのは困難ではあるとしつつも、12・13世紀のモンゴル部族の生活の記述として、『秘史』は情報の宝庫であると述べている。

『秘史』は、著者が述べるように、著述のスタイルにおいても、それ以前に手本としているものを持たない、モンゴル人による全く新しいタイプの文献である。後代に成立するモンゴル語の年代記は、記述にチベット語仏教史の影響を受ける傾向があるが、『秘史』にはそれが全く見られない。その意味でも、モンゴル人の歴史記述の「歴史」の中で、『秘史』が持つ独特の記述スタイルは非常に貴重なのである。

さて、ここではモンゴル時代における、モンゴル人の手による「歴史」記述について、もう少し検討してみたい。著者が本書の注で言及するように、13世紀のモンゴル人にとっては、「書くこと」自体がなじみのない手段であり、国や行政のためといった限定された目的のために「書くこと」がなされたのである⁽⁷⁾、という認識は重要であろう。その意味で、『秘史』が政治的な所産であることは確かなのである。一方でこの時代、大元ウルスでは歴代カアンごとに実録が編纂され⁽⁸⁾、フレグ=ウルスでは『集史』が編纂されている。また『集史』編纂においては『アルタン=デプテル』なる史料が利用されたという。これらも実際に執筆・

(7) 本書, p. ci, n. 241.

(8) 実録については、市村瓊次郎「元朝の実録及び経世大典に就きて」箭内互『蒙古史研究』外篇, 1930, pp. 1-10 参照。

編集した人物が非モンゴル人であったとしても、モンゴル政権の公式見解・正統観に基づくものであろうことから、広義のモンゴル人による歴史文献として見ることができよう。大元ウルスの各カアンの実録や『アルタン=デプテル』は失われてしまい、その記述スタイル、内容は現在ではほとんどわからないが、⁽⁹⁾『集史』にみえるエピソードと『秘史』に見えるそれが、ある部分で一致していることは夙に知られている。だが、史料間の系統関係については、未だほとんどわかっていない。

一方で、あまり言及されることはないが、14世紀に成立したチベット語史料中に、『イエケ=トブチアン』(tib. Ye ka thob can< mon. Yeke tobčijan)なる書物から要約された、モンゴルの歴史に関する記述が存在することも看過できない。現代モンゴルの学者であるBira氏は、14世紀成立のチベット語史料である『フウランテプテル』(*Hu lan deb ther*)の「モンゴルの王統」(Hor gyi rgyal rabs)に見える、チングスの先祖の系譜に関する記述と、それに対応する『秘史』・『集史』の記述を検討し、ボルテチノからチングスに至るこれら三史料間の人名対照表を提示している。⁽¹⁰⁾

Bira氏はこれら三者の記述が非常に似かよっていることを指摘するのみであるが、評者には『イエケ=トブチアン』を利用した『フウランテプテル』の記述と、『アルタン=デプテル』にも依った可能性のある『集史』の記述とが、非常に近いように思われる。現段階では実証の方途はないが、『イエケ=トブチアン』と『アルタン=デプテル』が、共通の祖本を持つ可能性を評者は想定している。

(9) 『アルタン=デプテル』についての議論は、小林高四郎「ラシード・エッディーンに見えたる民俗学的資料について — 『アルタン・デプテル』なる書の性質解明を中心として —」『民族学研究』12-3, 1948, pp. 53-91 (再録: 小林高四郎『モンゴル史論考』雄山閣出版, 1983, pp. 69-100); 吉田順一「『元史』太祖本紀の研究 — 特に祖先物語について —」早稲田大学文学部東洋史研究室: 編『中国正史の基礎的研究』早稲田大学出版社, 1984, pp. 357-383 参照。

(10) Bira, Š., "Some remarks on the *Hu-lan deb-ther* of Kun-dga' rdo-rje", *AOH*, 17, fasc. I, 1964, p. 76.

参考までに、以下に『フウランテプテル』が『イエケ=トブチアン』を利用したことについて述べている箇所を訳出する。

セチェン王(クビライ)は庚申の歳(1260年)から中統を五年、至元を三十年、つまり三十五年、王位にいらっしゃった。甲午の歳(1294年)に亡くなられた。コデンの息子はジビクテムルなど三人がいた。カシの息子はカドウ(カイドウ)である。その他は数えきれない。これらは『イエケ=トブチアン』から重要なものを抜き出したものから(記したの)である。セチェンの息子ドルジェに皇子はいない。ジンギムとイエカタフ(イエケ太后?)ゴゴチェン(ココジン)の皇子は長男がカマラで、次男のダルマパラは愚者である。三男テムルオルジャドウ王が元貞を二年、大徳を十一年、つまり十三年、王位にいらっしゃった。⁽¹¹⁾

この記述から『イエケ=トブチアン』は、クビライの治世までの内容を記している書物であると考えられる。また『イエケ=トブチアン』は、書名がモンゴル語で解釈できる点、大元ウルス(元朝)の漢語年号が記されている点から、

(11) 原文転写: se chen rgyal pos lcags po spre'u'i lo nas/ jo thung lo lnga/ ci dben lo sum cu ste lo so lnga rgyal sa mdzad/ shing pho rta'i lo gshegs/ go dan gyi bu ji big thi mur la sogs gsum yod/ kha shi'i bu ga du/ gzhan bgrang gis mi lang / 'di rnams dpe (sic. ye) ka thob.chen nas gal che rigs bshu pa nas/ se chen gyi sras rdo rje la sras med/ jing gim dang ye ka tha hu go gen gyi sras che ba ka ma la/ gnyis pa dharm'a pha la lkugs pa/ gsum pa the mur ol ja du rgyal pos dben cing lo gnyis/ ta'i ti lo bcu gcig ste lo bcu gsum rgyal sa mdzad/ (蔡巴·貢嘎多吉:著、東嘎·洛桑赤列:校注『紅史』民族出版社,1981, p. 30)。[校訂・下線は評者による]

しかし、この活字本は問題の ye ka thob chen の箇所を dpe ka thob chen と誤って記す。

Bira, Sh., "Some Extracts from Sh. Damdin's Manuscript Copy of the *Hu-lan deb-ther*", L. Ligeti, ed., *Tibetan and Buddhist studies. Commemorating the 200th Anniversary of the Birth of Alexander Csoma de Kőrös*, Vol. 1, Budapest, 1984, p. 74 に示された該当箇所のテキストでは正しく ye ka thob chen と転写している。同じく 14 世紀成立の『ヤルルン=チョエジュン』にも本文とほぼ同じ記事があり、釋迦仁青岱:著『雅隆覺沃教史(藏文版)』四川民族出版社, p. 83 のテキストをみると、ye ka thob chen と正確に綴られている。おそらく字形の類似によるミスであろう。

大元ウルスからチベット側にもたらされた書物である、と考えるのが妥当であろう。

『フウランテプテル』は『イエケ=トプチアン』の引用を明示した後、上に示したようにクピライ以降の記述も行い、トゴン=テムルの大都放棄についても記しているが、これらの記述が何に依るものなのかは明確には知り得ない。

『イエケ=トプチアン』と『秘史』を含めた諸史料との関係については、改めて検討したいと考えているが、いずれにせよ大元ウルスが自身の歴史記述を行い、それが「書かれたもの」としてチベットにもたらされたことは確実であろう。また同様のものが、あるいは『アルタン=デプテル』といった書物としてフレグ=ウルスにもたらされた可能性もある。⁽¹²⁾ モンゴル人の手による「書かれた」チンギス一族の系譜史料は、大元ウルスからモンゴル帝国領域内の主要地域にもたらされ、政治的に「正統な系譜」として認識されたと考えられるのである。これらの失われた文献の性格と『秘史』との関係は、本書ではあまりふれられていないが、今後も検討する価値があろう。この点において、チベット語史料は何らかの貢献ができる可能性を秘めていると思われる。

Introduction 7ではこれまでに発表された『秘史』の転写と翻訳の歴史が概観され、それらの年表も挙げられている。その中でも重要な研究については著者による評価も示されており、『秘史』の研究史として非常に有用である。特に Cleaves 氏の研究については、我々がこれまでに知ることができなかった事実も記されており、⁽¹³⁾ たいへん興味深い。なお、著者が 1972 年に出した『秘史』のローマ字転写と索引は、⁽¹⁴⁾ 現在でも広く利用されているが、その訂正・補遺が本書 Appendix 6 に収録されており、今後はこちらも参照すべきである。また、Cleaves 氏の『秘史』の翻訳における訂正・補遺も Appendix 5 に示されている。

(12) 本評、注(9)所引小林論文, p. 98, n. 2.

(13) 本書, pp. cv-cvi, n. 312.

(14) I. de Rachewitz, *Index to the Secret History of the Mongols*. (Uralic and Altaic Series, Vol. 121), Bloomington, 1972. 本書における『秘史』の想定原文は、これに依っている。

Introduction 8 では、近年の『秘史』に関わる研究状況が概観され、あわせて、中世モンゴル語の言語学的研究の概況が述べられる。また著者自身も編集に加わり現在準備中であるというモンゴル語辞書においては、中世モンゴル語の語形も示されることが予告されている。こちらの出版も今から楽しみである。

最後に Introduction 9 では、本書全般にわたる執筆方針が示されている。まずテキストの翻訳は正確で流暢な英語で書くことが目指され、テキストの文字通りの意味は脚注で示される。それゆえ、『秘史』本来の文学的表現は Cleaves 氏の訳のように反映されていない。これは、読者の便宜をはかった措置である。また、フォントを変えたりイタリック体を使用することで、括弧の使用を避け読みやすさに配慮する、とされている。確かに、本書の訳文は読みやすく理解しやすい言葉で書かれており、また括弧を用いた語の補足に煩わされることはなく、著者のこの試みは十分に成功していると思われる。

注釈部分は、ここ 20 年間の『秘史』の研究成果を最大限反映させた結果、その総量は著者の以前の注釈に比べると、2 倍に増えているとのことである。我々にとっては、ともすれば看過しがちな欧米言語で書かれた先行研究が多数引用されており、非常に有り難い。加えて、著者自身の最新の見解も随所に示されており、今後の『秘史』研究においては必ず参照すべきものであることは、言うまでもない。

また、索引に収録されている語彙数は、これまでに出版されている『秘史』の訳注書よりも圧倒的に多く、そのうえ多岐に渡っている。我々にとっては、工具書的にもこの索引は利用できると言えよう。

長年にわたり、『秘史』についての様々な新しい見解を提示し続けてきた著者による、一つの集大成として本書が出版されたことは、たいへん意義深いことであり、著者によって示された知見は我々に裨益するところ大である。『秘史』に関わる研究は、本書をふまえてさらに展開し、それらを承けた訳注研究が今後も編まれ続けていくことであろう。また、本書がモンゴル時代史研究全般に対して刺激を与え、研究の深化を促すことも間違いない。早くも、ウラーン

氏・四日市康博⁽¹⁵⁾氏が本書を利用した研究を発表している。いち早く本書に学界が反応している証左⁽¹⁶⁾と言えよう。

冒頭においても述べたとおり、遊牧民自身が記した史料として、『秘史』が持つ重要性は極めて大きいものである。遊牧騎馬民族のかつての生活や集団の構成、政治体制や軍事組織の実態を解明することは、ユーラシア史全体の理解において不可欠であるが、遊牧民自身が残した史料が語る情報はあまりにも少ない。我々は、定住農耕民たちが書き記した膨大な史料群と、断片的ではあるが非常に貴重な遊牧民自身が残した史料とをつきあわせ、史料批判を重ねつつ研究を進めるわけであるが、その中でも『秘史』の記述は決して看過されるべきものではない。つまりモンゴル時代史研究者のみならず、史料状況が決してよいとは言えない、モンゴル時代以前の遊牧民族史を研究する者にとっても、『秘史』から得られるところは多いはずなのである。本書がモンゴル時代史研究者はもちろんのこと、ひろく参照されることを願ってやまない。

(15) ウラーン(烏蘭)「『元朝秘史』の「馬阿里黒 伯牙兀歹」という言葉について」『史滴』26, 2004, pp. 131-123 (逆頁)；四日市康博「ジャルグチ考 —モンゴル帝国の重層的國家構造および分配システムとの関わりから—」『史学雑誌』114-4, 2005, pp. 1-30.

(16) なお、本書の書評はすでに D. O. Morgan 氏によって、*BSOAS*, 67-3, 2004, pp. 410-412 に発表されている。あわせて参照されたい。